

## 風土臨床から見た宮澤賢治の教育共同体構想

福島大学教育学部 青木真理

### 1. 風土臨床

筆者は2000年9月以来<sup>1)</sup>「風土臨床」という概念を提唱して、実践を報告してきている。風土臨床は、心理臨床家による「沖縄研究グループ」の共同研究のなかから生まれた。「沖縄研究グループ」は、1994年から沖縄（主に本島北部のやんばる地域）を訪問して、カミンチュウと呼ばれる伝統的宗教の担い手への聞き取りを行い、カミンチュウが司式する祭祀を見学、また時に祭祀に参加してきた。この訪問・調査の意図は、心理臨床が沖縄の伝統的宗教観に学ぶということである。そのなかで、「風土臨床」という概念は生まれた。その成り立ちと定義は、拙論<sup>2)</sup>に詳しいが、ここでは要約して述べることにする。

沖縄の伝統祭祀の観察から筆者は、祭祀は、人間と自然（カミ）との関係を「よい」ものに保つための工夫であると考えている。人間と自然のよい関係とは、人間が自然を“荒ぶる自然”ではなく、今森光彦<sup>3)</sup>の言う「暖かな自然」「肥えた体臭を発する土地」「研ぎ澄まされた荒々しい自然環境ではなく、光の交差する人間の生活の中に奏でられる暖かな自然」に保とうとする関係であり、そのような自然の恩恵のもとに、人間の暮らしは豊かで健康なものとなりうる。祭祀は、こうしたことをねらいとした一種の臨床行為であると筆者は考える。一方、面接室という密室のなかでクライアントとセラピストという二者関係において行われる心理臨床という行為も、その二者関係を包み、成り立たせるものへの視点が必要であると考えた。「風土臨床」は、心理臨床という行為を成り立たせている環境としての「風土」を考慮に入れ、「風土」の調節という視点から心理臨床の実践を行っていくことである。ここで「風土」という概念を導入するのは、心理臨床を成り立たせる環境というとき、客体化された対象としての環境ではなく、自己を含んで成り立つ全体状況を考えたからである。そして自己と風土は、多様な面において関係を切り結ぶ。

「風土臨床」はまたこのようにも説明されうる。祭

りが、それが行われる土地のありようと深く結びついていて、ところが変われば祭の特徴もそれに応じて変わるのと同じように、風土臨床は、ある個人にとってのほかならぬ自分の土地、ほかならぬ自分のからだを、心理臨床の展開の起点としてとらえなおそうとするものである。クライアントにしても、セラピストにしても、抽象的な空間に存在するのではなく、クライアント・セラピストという名の匿名的な存在ではなく、歴史性とおびただしい事物との関係性から成り立っている複合的な存在である。クライアントがどのような土地に生まれ、どのような家族のなかに生きており、何を食べ、どんなことばを話し、何に関心を持ち、何を悩んで生きているのか。その存在の多様な局面全体をさして「風土」と呼びたいと考える。心理臨床は、究極、クライアントの風土のアンバランス、歪みを調べていくことであろうとも考えている。

前述の拙論において筆者は「風土臨床」の方向性について、『風土』という観点を取り入れて心理臨床を行い、そしてそうすることで臨床行為がどう展開するかを観察しながら、クライアントの風土の調べに貢献しようとする<sup>4)</sup>ことと、「風土の調べをめざす多面的な方法の開発」と述べ、前者に関連しては、「風土」の観点から自験例について論じた。後者については、生活を構成する技術を見なおし、それらを直接的・体験的に学び、自らの生活の調べに活かす、とした。その試みとして、岩手県の藤沢町の「縄文野焼祭」への参加、七輪陶芸、相馬市在住の鍼灸師・荒利美による音のワークショップへの参加などがあり、それらについても以前述べたことがある<sup>4)</sup>。

これらは、現有の心理臨床のフィールドをより豊かにするための視点の模索としての「風土臨床」の展開といえよう。ほんとうは、ここでさらにもうひとつ、現状では実現が困難だから、拙論では言及していないが、付け加えたいことがある。それは、土地に定位して実践を行う共同体づくりの試みである。

筆者らが繰り返し訪問している沖縄のムラは、沖縄本島の北部にあり、筆者らが約6年間にわたって聞き取りを行った女性A氏がカミンチュウをつとめていた<sup>5)</sup>。過疎化がすすみ、祭祀の維持も困難な状態のム

ラをA氏は、カミンチュウとしてよく面倒をみていた。拙論<sup>2)</sup>ですでに述べたことだが、初夏の行事のアブシバレーは、畔の虫払いの行事であり、実りの障害になる虫の退散を願い、豊年を祈願するものである。A氏がカミンチュウを務めるムラにおいては、アブシバレーはワカクサという行事とセットで行われる。A氏の説明によれば、アブシバレーはムラの行事、ワカクサはカミンチュウだけで営む行事ではあり、新しく生まれた赤ん坊の健康を祈る行事である。ここで明かなのは、個人の新生、新しく生まれることと、ムラ・共同体の穢れ払いすなわち新生とが、重なっているということである。この事例が示すように祭は、個人の命題と共同体の命題を同心円的に関係づけるものともいえるだろう。「風土臨床」の実践においても願うのは、このような共同体づくりである。

その文脈で筆者の関心をひいたのが、宮澤賢治の「農民芸術概論綱要」である。賢治は「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と述べており、上述の個人の命題と共同体の命題の同心円的關係に言及している。本論は、「農民芸術綱要」にあらわされた宮澤賢治の共同体づくりのめざしたものを、風土臨床の観点から論じることを目的とする。

## 2. 「農民芸術概論綱要」

宮澤賢治は、その37年間の生涯のなかで、花巻農学校において4年余の教員生活を送り（1921年12月～1926年3月）、その後退職して亡くなるまでの5年間に、羅須地人協会をつくり活動した。

「農民芸術概論綱要」は、退職する直前、岩手国民高等学校での講義において、論じられたものである。岩手国民高等学校とは、「県の教育会と農民連合会の主催で行われた成人教育の試みで、期間は一～三月」<sup>6)</sup>であった。この成人教育学校で賢治が担当したのは「農民芸術」という科目であり、その授業のうちの6回分をまとめたノートが、現在私たちが目にし得る「農民芸術概論綱要」<sup>7)</sup>である。これは序論に始まり、それに続く8章があり、結論で締めくくられている。序論の全文を以下に引用する。

われらはいっしょにこれから何を論ずるか。  
おれたちはみな農民である ずるぶん忙しく仕事もつらい  
もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった  
近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於いて論じたい  
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない  
自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する  
この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか  
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある  
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである  
われらは世界のまことの幸福を索ねやう 求道すずに道である

地域の農業青年たちのための成人教育の場は、生涯教育の先駆けといえるであろう。その場において、「農民芸術」と題する授業を行ったことは、どのような意味があるのであろうか。

賢治はここにおいて、農をなりわいとするものたちの創造的な共同体をつくらうと考えていたのではないだろうか。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という節の「世界」は小さくも大きくも考えられ、法華経信仰をもち、世界人であろうとした賢治は究極的には全世界、全宇宙の「幸福」をめざしていただろうが、まず最初のとりかかりとして、自らを含むその土地の農業青年たちの「世界」の幸福を念頭においていたのではなかろうか。まずは個々の農業青年が「もっと明るく生き生きと生活する」ために、賢治は地域共同体を作らうとしたのではないか。

「序論」に続く「農民芸術の興隆」では次のように述べられる。

曾てわれらの師父たちは乏しいながら可成楽しく生きてゐた  
そこには芸術も宗教もあった  
いまわれらにはただ労働が 生存があるばかりである  
宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い  
芸術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した  
(後略)

ここでは賢治は、「われらの師父たち」の労働には宗教と芸術がともにあったのに、それがいまはわれらを離れ、労働のみが独立して残った、と述べ、自らの目指す共同体における、宗教と芸術と労働の再統合を意図している。

続く章「農民芸術の本質」では、次のように述べられる。

(前略)

農民芸術とは宇宙感情の 地 人 個性と通ずる具体的なる表現である

そは直観と情緒との内経験を素材としたる無意識或は有意の創造である

そは常に実生活を肯定しこれを一層深化し高くせんとする

(後略)

ここでは「実生活」の「肯定」とある。次の章「農民芸術の分野」に挙げられているように、賢治の目指す「芸術」は、生活のなかのあらゆる技術、生活のさまざまな側面、人間の五感と身体に十分に結びついたものである。農作物を作る技術と、豊作を願う信仰・儀礼と結びついた、芸術的表現のすべて、呪術と芸術と生活が一体であった「師父」の時代の芸術のありかたを再現しようとするものでもある。

このあと、「農民芸術の(諸)主義」「農民芸術の製作」「農民芸術の産者」「農民芸術の批評」とづつき、「結論」の前の章「農民芸術の総合」では冒頭次のように述べられる。

おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの大きな第四次元の芸術に創りあげようでないか

賢治の花巻農学校時代の教え子に聞き取りを行って授業の再現を試みた畑山博の著書<sup>5)</sup>によれば、賢治は「とにかくこの地域のこただけ勉強しろ」と言い「きみらは東京に行って百姓をするのではないのだ」と語ったという。科学の普遍性・法則性を教えつつ、それを具現化する場としては、この地域ということに徹底的にこだわっている。「われらの田園」「われらの生活」という地場への強烈なこだわり、地域に根ざしながら「第四次元」という、可視的世界を越えるところまで到達しようとする。また、その地域に根ざさな

ければ、「第四次元」には到達できない、と言っているようにも思える。

賢治たちにとっては花巻の地が「われらの田園」「われらの生活」であった。「おお朋だちよ」と呼びかけられた対象は、花巻の農民だけでなく、全世界の住人が含められていたことであろう。それぞれがそれぞれの場で、「われらの田園」を「第四次元の芸術」にまで練り上げることを試みることで、それが世界の「朋だち」に対し賢治が求めたことではなかったのか。

### 3. 名づけられた「風土」

世界的な視野をもちつつも、出発点としては生まれ育った馴染み深い土地であった。しかし、ありのままの土地を出発点としたのではなく、賢治は土地に「イーハトヴ」などの再命名を行った。

イーハトヴは、賢治が生前刊行した唯一の童話集『注文の多い料理店』の自作広告のなかでは次のように説明されている。「イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウドたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿つた鏡の国と同じ世界の中、テーパンタール砂漠の遙かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。実にこれは著者の心象中に、この様な情景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である」。あるいは、『ポラーノの広場』では「あのイーハトヴのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市」という記述がある。あるいは、農学校時代に生徒としばしば訪れた川岸に「イギリス海岸」と名づけたりもしている。これら、賢治による再命名は、自己の関わりというフィルターを通して、岩手、盛岡、といった土地を“賢治の風土”としたということであろう。そしてそのことには、局所性をもちつつ普遍性を志向するという意義があったと思われる。

賢治の再命名は、筆者にとっても「なぜ沖縄だったか」という命題についての示唆を与えてくれる。筆者にとって、沖縄は、自然と人間との関係、風土と自己について考えるにあたって、もっとも適切な場所であった。つまり、そういったことが見えやすい地理的・文化的条件に恵まれた土地であった。沖縄という一定の土地で発見したことは、「風土臨床」という概念の形成と実践を通じて、普遍化されつつある。そうしたなかで、筆者は「オキナワ」という表記のもとに沖縄

のことを考えてみることもある。「オキナワ」を体験した目で、自分が住んでいる地域を眺めたとき、そこにも「オキナワ」を発見することができる。たとえば鎮守の杜とその入口の赤い鳥居は、沖縄でのクサティムイと呼ばれるウタキと遙拝所を思い起こさせる。筆者にとって、「オキナワ」という呼称はいわば、賢治の「イーハトヴ」にあたるといってもよい。筆者は「オキナワ」のフィルターで日常、心理臨床というなりわいを見なおし、あらたな文脈のなかに再構成しようとしている。

#### 4. 生活という芸術

宮沢賢治について語る時、賢治の15年後に誕生した岡本太郎のことが思い出される。拙論<sup>21</sup>には次のように述べた。

宮澤賢治は、孤立化して意味のすりきれた諸技術を「第四次元の芸術」へと統合しようとした。岡本太郎は、歌、踊り、文学、絵画、治療、宗教などの独立した分野へと分化する以前の、未分化で根源的で本源的な人間の行為を「呪術」と呼び、その復活をたえず企図した。両者のめざす方向は逆のように見えて、孤立したものにつながりを与えて全体性を取り戻すという点で共通する。「風土臨床」は創造的で相互治療的な風土の造という点で、「第四次元の芸術」創造に共通し、生活を構成する技術の治療的な意義を見出すという点で「呪術」と共通する。

賢治は、宗教と芸術をはぎとられて純粋な労働に墮してしまっただけで、多面的で創造的な行為としての農業へと回復させようとした。

岡本太郎は約10年間のパリ遊学、兵役のあと、日本で創作活動を展開するなかで「縄文文化」を「発見」する。それは、1960年代にあいついで発表された「沖縄文化論」や東北の民俗信仰についてのルポルタージュに明らかである。岡本は、沖縄と東北を取材するなかで日本を「再発見」した。琉球の島々をめぐる取材において岡本は「島のこの素裸な風物にふれると、日本人の奥底にまだ生動している生活のきめを直観して感動する。それは見過ごしてはならない、微妙なニュアンスではあるが、またわれわれを決定しているものではないか。」<sup>91</sup>と述べている。

岡本のいう「生活のきめ」を重視する芸術観は、賢

治のイメージする農民芸術との共通項を見出す。

世界人としていわば外側から日本を眺めた岡本が再発見した日本の「生活」、花巻という土地に根をおろしながら、思索のうへでは、土地の限界をこえて「イギリス海岸」や銀河系へも達した賢治が芸術として練り上げようとした「生活」、ベクトルは異なるが、生活の諸相、諸技術を新しい文脈のなかにとらえなおし、それらを互いに関連付けようとした点は共通していた。岡本のキーワードは生活に底流する呪術性と縄文性の発見であり、賢治の場合は、統合のイメージとしての「第4次元」であった。

#### 5. 賢治の教育共同体

賢治は「農民芸術概論綱要」で謳い上げたことの実現をめざして、「羅須地人協会」での活動を開始する。しかしその試みは拡大することなく、ごく短い期間のうちに、賢治の死によって終わった。

賢治が存命中に具体的な形での完成をみなかった「共同体」づくりではあるが、その思想の種子は散らばった。鳥山敏子の「賢治の学校」<sup>101</sup>もその種子をひきつごうとするもののひとつである。

「賢治の学校」は、2004年1月現在のホームページによれば、1994年に、「その精神を宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』に求めて始まった〈学びと動き〉の総称」<sup>111</sup>であるという。1995年に長野県の廃校を利用して若者の学校を開校し、その後1997年、立川市に拠点を定め、「東京 賢治の学校」とし、2002年4月よりNPO法人として活動している。大きく分けて子どものための全日制の自主学校（小・中学部）と、おとなのための活動がある。その活動の内容は多岐にわたる。シュタイナー教育を基にしたカリキュラム、竹内敏晴<sup>12</sup>による「ことばとからだのレッスン」、川口由一<sup>13</sup>による「自然農」についての学びなど。

これは、賢治の思想の実現をめざす、教育共同体の試みといえるだろう。

筆者もまた、70年前に賢治によって行われた「おお、朋だちよ」という、教育共同体実現の呼びかけに揺り動かされる。「農民芸術の総合」で賢治が書いている「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」は、一級のプロパガンダであって、筆者もまた、「われらはいっしょにこれから何を論ずるか……」と新たな「綱要」を創り出してみたい気持ちにさせられるのである。福島の地において筆者は永

遠の客人であるが、客人なりにこれまでの数年間で形成してきた教員、学生とのネットワークをもとに、からだと土地を起点とする風土臨床の展開を試みていきたいと考えている。別稿においてその実践の報告は行いたい。

#### 参考文献・資料

- 1) 日本心理臨床学会第19回大会（京都文教大学）自主シンポジウム「気と風土をめぐる臨床」での報告
- 2) 青木真理 トランスパーソナルと風土臨床（諸富・藤見編集『現代のエスプリ トランスパーソナル心理療法』至文堂 2003所収）
- 3) 今森光彦 里山物語 1995 新潮社
- 4) 青木真理 “祭”と心理臨床－藤沢町縄文野焼祭への参加体験から－ 福島大学生涯学習教育研究センター年報 第7巻 2002
- 5) A氏は2000年7月に急逝された。
- 6) 畑山 博 宮澤賢治 幻の羅須地人協会授業 廣濟堂出版 1996
- 7) 宮澤賢治 農民芸術概論綱要（校本『宮澤賢治全集』第12巻上 1975 所収）
- 8) 畑山 博 教師 宮澤賢治のしごと 小学館 1992
- 9) 岡本太郎「何もないこと」の眩暈 『神秘日本』 岡本太郎の本3 みすず書房 1999
- 10) 鳥山敏子 賢治の学校 宇宙のこころを感じて生きる 1996 サンマーク出版
- 11) 「東京賢治の学校」ホームページ  
<http://www1.newweb.ne.jp/wa/kenji/>
- 12) 竹内敏晴 演劇活動を経て、1972年竹内演劇研究所を開設、障害児教育にもかかわる。「からだごとばのレッスン」を全国で展開している。著書に『ことばが劈かれるとき』など。
- 13) 川口由一 奈良県桜井市で「耕さず、肥料は施さず、農薬除草剤は用いず、雑草を敵として取り去ら」ない「自然農」を実践している。著書に『妙なる畑に立ちて』野草社 1990など